資料２－２

宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）の取組状況について

目標	自立と社会参加
主な取組	特別支援学校における進路指導充実
事業名	５　特別支援学校進路指導充実事業
担当課	特別支援教育課，県立特別支援学校
事業内容	○特別支援学校地域連携協議会の開催 ○講演会の実施 ○進路支援研修会の実施
取組方針・達成目標	県立特別支援学校に在籍する生徒一人一人の高等部卒業後の自立と社会参加に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促すため、校内の組織体制の整備や労働・福祉等の関係機関と連携、地域や産業界等の人々の積極的な協力を得るなどして進路指導を充実させる。
令和５年度事業概要	○進路指導連絡協議会の実施（３ブロック実施） 北部［代表校：小牛田高等学園］、中央［代表校：利府支援学校］、　南部［代表校：聴覚支援学校］ ○進路支援研修会の実施 （対面での情報交換を再開予定。進路指導担当者の横のつながりを強化していく。） ○各学校の進路指導主事を対象に新しい職域とのネットワーク作り

視察事業名	特別支援学校進路指導充実事業 【小牛田高等学園】	視察実施日	令和5年9月26日
評価ポイント	（１）本事業の取組について （２）進路指導充実に向けた学校側の取組について		
意見・感想	（１）本事業の取組について ・就労について、双方（支援者側と卒業生）の発表があり共通認識できていること、また、それぞれの立場だからこそ分かることが具体的に示されたことは、とても良い構成と感じた。 ・課題としては、対象者が生徒・保護者ということもあり、成功例の紹介が中心であったが、うまくいっていない事例からも必要な支援を検討できる機会があると良いと感じた（事例検討等。） （２）進路指導充実に向けた学校側の取組について ・在校生が翌週から実習開始するタイミングでの開催は、とてもタイムリーだと思った。実習直前で緊張感を持って話を聞くことができ、また、実習先で即実践できる機会があることは重要だと思う。 ・今後同様の事業が継続・拡充されていく際には、実施時期に十分配慮していただけると良い。 ・タイプの異なる卒業生（3名）の例が挙げられたが、3名とも学校生活で習ったスキルが十分活かされていると話しており、学校での支援内容が就労に即した有意義なものであることが推察された。 ・スキル的な獲得だけでなく、趣味の充実・適性などの自己理解・主体性・就労に対する意識など内面的な要素も就労の継続に結び付いていることが語られていた。 ・支援者（木村氏）からも、就労支援を必要とする利用者の多くが、スキル的なこと以上に「将来のイメージや相手意識、自己理解などの獲得」から支援していく必要があると述べており、やはり内面的な要素の影響は大きいと感じた。 ・今回発表した卒業生のように、そのことを獲得できた人とそうでない人との違いがどこにあるのかを検証することで、幼児期から自立に向けての切れ目のない支援や、保護者との連携において重要なことが見えてくるのではないかと感じた。		

意見・感想	（１）本事業の取組について ・「進路講話及び卒業生事例発表会」において、就労支援カレッジ「ぴゅあ・さぽーと」（木村氏）や卒業生3名による就労の話を聞くことができ、参加している生徒たちは真剣な面持ちで聞いていた。 ・参加の保護者も、熱心にメモを取ったりしている様子が印象的だった。 ・一方で、子供たちや保護者にとって将来への不安が大きいように感じられた。 ・このような講演会などをとおして、将来への理想を描き、不安を期待に変えていく取り組みは、子供たちにとって非常に大事なことであり、保護者にとっても将来像を描く良い機会になるのではないかと感じた。 （２）進路指導充実に向けた学校側の取組について ・「進路講話及び卒業生事例発表会」は、非常に意義のある事と感じた。その中で発表された卒業生の話にあった、「周りに報告連絡相談すること」、「挨拶や言葉の使い方」など学校で学んだ働くためのスキルが、実際に企業でどう活かされるのかが発表され、子供たちも学校の授業に対し、これから意欲的に取り組めるのではないかと感じた。 ・卒業生に対し、学校の取組みに改善点・要望点はないかを尋ねたところ、特に大きな問題点はないとの返答をもらうことができていた。 （３）その他 ・校長先生から、「学校では、支援をなるべく減らしています。子供たちが巣立つ先の社会は、十分に支援がある社会ではないので。」との言葉が印象的だった。支援を減らすという言葉は、少し不安な気持ちになったが、後にその言葉は一蹴されることになった。 　学校を訪問した私たちが席に着くと、生徒がお茶を出してくれ、部屋に入って来る際のお辞儀の仕方やお茶の出し方がとてもスムーズだった。何回も練習していることが伝わり、とても立派だった。 ・「進路講話及び卒業生事例発表会」では、在校生やその保護者に対し、就労支援カレッジ「ぴゅあ・さぽーと」（木村氏）からの講話や、卒業生3名による就労の様子が聞ける会となっていました。参加している学生たちや保護者は、皆、真剣な面持ちでメモを取ったりしており、将来への不安が大きいのだと感じた。もちろん、私も学生の頃にも将来への漠然とした不安があったが、障害を持つ子供たちや保護者は、もっと不安なのかもしれないと感じた。 　しかし、講話をとおして、生徒たちが働くことの意義や将来の自分を思い描くことの大事さを教わったり、卒業生から就労後の自分の暮らしぶりを教えてもらうことで、働くことへのより明確なイメージを膨らませることができたように感じた。 ・特に卒業生である先輩の事例発表会では、初々しい社会人3年目としての喜びや新たな発見などを聞くことができた。仕事は、毎日忙しく、また、人に合わせることは難しいと感じる事。けれども仕事をやりとげた時の達成感や、人を助けることができるようになったり、仕事を任される喜びもある。「自分のお金を得て、趣味に使えるようになったことが楽しい。」「挨拶や言葉遣いの重要性を知った。」「失敗をしたり困った時は、上司や周りに報告連絡相談して対処すること。そして失敗を繰り返さないためにどうするかを考える。」「学校で学んだことが活かされている」などの話を聞いていて、私も一社会人として襟を正さないといけないと感じた。 ・卒業生に話を聞く機会があり、「学生時代に就労に向けての実習等で改善する点、こうだったら良かった等と思うことはありますか？」と聞いたところ、「学校の時に教わったことがとても役に立った。実習に行くことで自分に合うかどうかを考えることができた」など、前向きな回答があった。 ・最初に校長先生から「支援を減らしている」という話があったが、生徒を想う指導の一環であり、その分、社会における実践的な指導や将来のなりたい自分像に寄り添って支援がされていることを感じた。 生徒たちは、自信を持って卒業し、社会に出ていることがわかった。

<table>
<tr><td>視察事業名</td><td>特別支援学校進路指導充実事業
【西多賀支援学校】</td><td>視察実施日</td><td>令和5年8月31日</td></tr>
<tr><td>評価ポイント</td><td colspan="3">（１）本事業の取組について
（２）進路指導充実に向けた学校側の取組について</td></tr>
<tr><td>意見・感想</td><td colspan="3">（１）本事業の取組について

・現代の社会において、自立と社会参加は、障害のない児童生徒にとっても自己実現のためのゴールにも値する大きな課題となっているものと考える。
・特別支援学校の進路指導を充実させるための支援となる本事業は非常に有意義なものであると考える。

（２）進路指導充実に向けた学校側の取組について

・中学部の進路指導の目標にそって、具体的にどのような指導計画や実践がされているのかが、もう少し詳しく説明されると良いと感じた。
・高等部の進路体験週間でも、校外委員の方や関係事業所等との連携があると良いのではないか。
・協議テーマの現状と課題をみると、学校への支援がかなり必要なのではないかと感じた。
・進路選択や進路指導における、学校の孤立にもっと寄り添える方法が必要ではないか。

（３）その他

・重度の障害がどのくらいの状態なのか、実際の生徒の活動の様子を事業所の方々に見てもらうことが必要だと感じた。「雇用してもらう」意識ではなく、本人が「何かしら自己実現できる道」を探っていくことが肝要。
・制度が自治体によって異なることに関して、自治体（福祉）とのパイプを太くできるコーディネータが学校にも必要ではないか。</td></tr>
<tr><td>意見・感想</td><td colspan="3">（１）本事業の取組について

・進路支援連携協議会は７名の校外委員と１０名の校内委員による構成であった。病弱特別支援学校の進路については、毎年、卒業人数が少ないため、校内外の委員による情報交換等は有意義であると感じた。

（２）進路指導充実に向けた学校側の取り組みについて

・在籍する児童生徒の実態は様々で、教育課程は、準ずる内容から重度重複障害の内容まで幅広い対応を行っており、一人ひとりに応じた指導を行う上で様々な工夫がされていた。
・生徒の実態に応じた、きめ細かい指導が行われていると感じた。
・卒業生は、この４年間で多い年でも１０名以内のため、進路先などの情報の積み重ねが大切であると感じた。
・重度重複障害児童生徒や、知的障害がなく、身体に重度の障害があったり、医療的ケアが必要な児童生徒の進路指導に課題があるとのことであり、今後の更なる取組の充実が求められると感じた。</td></tr>
</table>

主な取組	インクルーシブ教育システムの構築（優先課題３）
事業名	30　共に学ぶ教育推進モデル事業
担当課	特別支援教育課、県立特別支援学校、市町村教委、小・中学校等
事業内容	○モデル校による支援体制の構築 ○共に学ぶ教育推進検討会（モデル事業連絡会）の開催 ○先進地の視察
取組方針・ 達成目標	令和2年度に第Ⅱ期共に学ぶ教育推進モデル事業の3年目を迎えるに当たり、第Ⅱ期の課題の整理と第Ⅲ期共に学ぶ教育推進モデル事業（令和3年度～令和5年度）実践校の選定を行う。また、令和4年度中に令和6年度以降の事業推進の在り方を提示する。
令和５年度 事業概要	第Ⅲ期　共に学ぶ教育推進モデル事業（令和３年度～令和５年度）３年目 モデル校７校：角田市立桜小学校　角田市立北郷小学校　角田市立北角田中学校 大崎市立松山小学校　大崎市立松山中学校　角田高等学校　松山高等学校 ・専門家派遣（モデル校毎　年３回実施） ・実践事例の蓄積と最終年次のまとめ ・専門家等連絡会の実施（令和６年２月１９日を予定） ・先進校視察（希望に応じてモデル校１校につき、１名分の旅費支給）

視察事業名	共に学ぶ教育の推進 【松山高等学校】	視察実施日	令和5年9月11日
評価ポイント	（１）実践校における支援体制について		
意見・感想	（１）実践校における支援体制について 「ユニバーサルデザインの考えを取り入れた教育活動の実践と小中高等学校の連携」 が副題としてついている事業についての授業実践を視察させていただいた。最初に、特別支援コーディネーターの村上真由美教諭より、松山高校の「共に学ぶ教育」について説明があった。小中高の連携により高校教諭が苦手とする、学びやすい教室環境の整備や、多様な生徒への言葉のかけ方のノウハウが伝わり高まっているようであった。 続く授業実践では、音楽科の佐藤夏南教諭が「身近なものを使ってリズムを演奏しよう」と題して、手や机やコップを使いたたくなどにより音を出し音符で表現しながらリズムをつくっていく授業が行われた。そこでは、学び合う者同士が安心して自己表現できる空間が成立しており、遠慮や恥ずかしさなどを越えて作品を発表している姿があった。数年かけて「共に学ぶ教育」が高まっていることを感じた。 授業後の意見交換でも小中高での連携や学びに向かう生徒の姿勢の良さ、そして授業者の明るい前向きな雰囲気と安心できる学びの空間と仲間作りが行われている事などが話題となった。 また、県教育委員会も含む当該事業の専門家チームのメンバーも揃い、方向性の確認や研修の充実も図られていることが伝わってきた。特に東北福祉大学の大西教授や鈴田准教授からは別に資料等も用意いただき、共に学ぶことの意義や授業のユニバーサルデザインが求められる背景などにも言及されており、理解が深まる機会となった。 （２）その他 時間があれば、校舎見学なども行い、この事業とともに変化した環境整備の成果も視察できればより有意義だったとも思っている。特に図書室あたりの取組は他の学校にも参考になるものと聞いている。 最後に、生徒が今回の音楽の授業においてリズムを「音符」に書いて表現する場面があったが、どの生徒の音符も丁寧できれいにプリントへ表現されていたことが印象的であった。このあたりも数年かけて醸成された安心して学べる環境の整備の成果と思えた。		
意見・感想	（１）実践校における支援体制について ・事業の取組について、３年目を迎え、先生方の意識の高まりと、研究の成果を感じた。 初年度、ＵＤに視点を当て、学会での考え方等を整理するなど、「環境のＵＤ」に着目した取組から始めている。先生方の変化に対する不安や違和感を取り除きながら、教室内の掲示物の整理等着実に前進させ、共に学ぶ教育推進の最終的な方向性として生徒個々ための「学びのＵＤ」へと軌道修正していった過程も評価できる。 研究によって、一斉指導で追いつけなかった生徒を含め、個の力を発揮して学ぶこと、課題解決に向けたプランニング力を付けること等、授業の在り方を追求し、それが授業の型として形作られ、校内で共有されていると感じた。 ・参観した「音楽」の授業でも、導入時のアイスブレイク的な配慮、展開場面では、個々が学習を進めるためのオプションの提示、グループ学習を取り入れた生徒同士の対話的な学習等、工夫されており、指導案にはＵＤＬガイドラインの視点も明記され、意識の共有化が図られていた。　事業の進捗については、ＷＧがよく機能し、取組を牽引している。また、専門家チームの指導・助言が成果に現れている。さらに事業で得られたＵＤＬのノウハウを発信し、横展開しようという意識も素晴らしい。　この事業の成果が、高校や地域の小中学校へとつながり、整理されていけば、さらに大きな成果が得られ、地域の共に学ぶ教育の推進が図られると考える。この実践が松山高校の教育実践の特色となることを期待したい。		

視察事業名	共に学ぶ教育の推進 【大崎市立松山小学校】	視察実施日	令和5年9月12日
評価ポイント	（１）実践校における支援体制について		
意見・感想	（１）実践校における支援体制について ・皆が参加できるような配慮がされていた。無駄話一つなく、生徒の真剣な表情が印象的であった。トリオでの取り組みも、それぞれ意見や気づいたことを出せていたと感じた。Ｔ２の先生方の役割分担もスムーズ・的確で、支援、配慮が必要な生徒も自然な形で参加ができていた。 ・あらかじめの準備、配慮、工夫が様々なところで感じられた。先生の指示も一つ一つわかりやすく、グループでの発表の際もタブレットをうまく活用されてた。場面の展開があり、生徒も飽きることなく集中できていたと感じた。また、必要なものだけを机上に置く（出す）ことも他に気をひかれない工夫だと感じた。 （２）その他 ・中学校までは、配慮が必要な生徒への丁寧な支援をされているところが多いと思うが、高校では、まだ十分とは言えず、特に、自閉・情緒障害の支援学級に属していた生徒は、進路にかなり苦慮している。入学はするものの、不適応を起こし不登校になったという話も耳にしている。発達障害があっても学びやすい環境の整備が必要だと感じている。二次障害や、成人期の引きこもりの予防のためにも、理解を得られる環境が重要と考える。		

主な取組	ICT機器の活用（優先課題２）
事業名	R5-3　特別な支援を要する児童生徒に対するICT活用教育推進事業
担当課	特別支援教育課，県立特別支援学校
事業内容	○病気療養中の児童生徒に係る在席校との同時双方向型遠隔授業の実施 ○AIドリルによる課題、特性の分析とICT危機の更なる活用
取組方針・達成目標	同時双方向型遠隔授業の実施による入院等で生ずる学習の空白期間の解消や友人とのつながりを継続させるとともに，児童生徒がＡＩドリルを活用して主体的に学習に取り組む環境を整備する。
令和５年度事業概要	○病院で療養中の児童生徒に対し、在籍校とのつながりと学習の継続（在籍校における集団での指導）を図るため、ICT教育推進コーディネーターを配置し、機器の運用や在籍校当との相談に応じながら、「アバターロボット」による同時双方向型遠隔授業の実施に取り組む。 ○ICT機器の活用を推進するためのモデル校にAIドリルを導入し、学習の分析を行いながら個に応じた指導を行う。

視察事業名	ＩＣＴ機器の活用【教育委員会会議室】	視察実施日	令和５年８月２９日、令和５年８月30日
評価ポイント	（１）実践内容について（体制づくり，活用状況等）（２）普及推進の視点から見た本事業の取組について		
意見・感想	（１）実践内容について（体制づくり，活用状況等） ・歴代３名の医教連携コーディネーターから、県立こども病院・東北大学病院での従来の実践と仙台および石巻の両赤十字病院での新たな取り組みの報告を受けるとともに、使用するＩＣＴ機器のデモも体験でき、具体的内容を深く知ることができた。 ・特に、一般には閉鎖的とされる病院との、「子どもを中心」としての協力体制の構築経過については、今後さまざまな方面での参考となる内容である。 （２）普及推進の視点から見た本事業の取組について ・ＩＣＴ機器の活用は、コロナ禍で社会全体で進んだが、その先行事例のひとつが、長期病気療養児への学力・教育機会の保障を主眼とした取り組みである。ここでの取り組みを事例として十分に検証することにより、今後の宮城県における教育全体のＤＸ推進モデルとして位置づけることが可能となるとの印象をもった。特別支援教育のみならず、将来、ＤＸを当然のこととするであろう本県の子どもたち全体の育成にとって、重要な方向性を示すものであると考える。 （３）その他 ・従来より指摘されているが、ＤＸに関わる世代間による認識の違いを、年齢の高い世代ほど強く認識すべきである。年長世代がもつ、使い慣れない機器やシステムへの抵抗を取り除くような、教員・職員等への研修・体験活動が重要であると思われる。		
意見・感想	（１）実践内容について（体制づくり，活用状況等） ・教育、福祉、医療の連携は重要なこととして長くいわれてきたが、とりわけ「医療」との連携は難しい事情が様々あった。「医教連携コーディネータ活用事業」は、教育と医療の積極的な連携が実現できているという点でも意義深い取組である。入院中の生徒が教室の授業に双方向参加ができること、それが出席認定なされて単位修得につながることは画期的なことであり、これまで出席日数不足、欠課時数オーバーで進級や卒業を断念せざるを得なかった状況が改善されること、生徒本人の「みんなと一緒に学びたい」という思いを支えることができること、今後の活用事例が増えることを期待する。 （２）普及推進の視点から見た本事業の取組について ・文部科学省委託事業の場合、予算の都合等で年限があるため、実績に成果があっても事業廃止という事態が起こるため、その時に備え、県独自で事業継続できるような準備が必要と感じる。かつて、文科省の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」（平成7.8年度）の委託を受け実践研究を行い、どの学校も課題とともに大きな成果を得たが、廃止となった。廃止の翌年、PTA予算で事業を継続（回数は激減）、その後、県の事業として整備されたと記憶している。継続できることを期待するものである。 ・校長会等において事例も含めて説明し、さらに活用事例が増えてほしいと切に思う。 ・今後はさらに、不登校の生徒も対象になればよいと考えるところである。		

意見・感想	（１）実践内容について（体制づくり，活用状況等） ・入院生徒に対する教育保障体制整備事業について、及び医教連携コーディネーターの役割について詳しく説明を受け、よく理解することができた。 ・体制づくりにおいては、管理職のリー ダーシップが重要なポイントであると思った。 （２）普及推進の視点から見た本事業の取組について ・ 事業内容及び実践例、効果等について、広く学校や病院、保護者に理解を得る場を積極的に設けてほしい。 ・ デモビデオ等の作成も効果的と思われる。 （３）その他 ・生徒の主体性・心情等を考慮し、可能な限り履修・修得への合理的配慮の工夫を実践してほしい。
意見・感想	（１）実践内容について（体制づくり,活用状況等） ・「入院している高校生への学習支援」と題して富谷高校、宮城広瀬高校の先生方よりご説明いただいた。自分も当事者として現在のような十分な体制が整備されていなかったこともあるが、支援が十分に受けられず不安や焦りになったこともあるので、高校生の心理状態は想像に難くない。 また、不安や焦りはスライドにもあるように、勉強のみならず友人関係、部活なども課外にもおよび、その中でも友人関係は高校生というかけがえのない時期に孤立を防いだり、一生涯の関係構築にも繋がるため、県としても現場としても事業促進に努めていただきたい。 ・テレプレゼンセンスロボット「KUBI(クビ)」は初めて拝見したが、自宅や病室内で孤立しがちな生徒に対する支援はもちろんのこと学習へのモチベーションアップに繋がることと感じた。デモンストレーション後質問させていただいたが、今後KUBIが必要な生徒が増え、生徒数名に対しKUBIが教室に1台となると、各生徒の意思通りKUBIの操作が可能になるのかを知りたい。 （２）普及推進の視点から見た本事業の取組について ・県に対しては事業そのものの周知はもとより、例えば総合文化祭でKUBIのデモンストレーションを行い、直接事業に関わる関係者のみならず、県民全体に事業の周知を図り理解を深めてもらう方法等考えていただきたい。 （３）その他 ・「入院している高校生への学習支援～支援の実際・成果と課題～」のスライド2「支援割合と内容」内において、支援なしの理由がH30「病状より学習支援を望まない又は治療に専念させたい」、R1R2「病状により学習支援を望まない又は実施が難しい」、R3「病状の悪化により、学習が困難であった」と異なるところがあり、H30「治療させたい」とR3「病状の悪化」については理解できるが、それ以外の「望まない」について理由があるのか。理由によってはICT支援以前の問題があるのではないかと思う。